

# 詩人 茨木のり子について

湯 本 明 子

手元には茨木のり子の同名の詩集が二冊ある。

表題は『倚りかからず』（一九九九年十月発行）第一発行と、（二〇一五年五月二〇日）の第二発行のもの。二冊目を購入する折、或は内容が異なるものかと考えてのことだった。装丁などが異なるものの、内容は同じものであった。

更に『清冽』という表題で後藤正治が「詩人茨木のり子の肖像」（二〇一四年十一月中央公論新社）の副題のもと、彼女の詩人として生きた精神と、その航跡を辿っているものも入手した。

さて先に発行された詩集『倚りかからず』は、初出版から七年振りの詩集であり、書き下ろし十二篇全十五篇、期待にたがわぬ詩集である。

声高に叫ばず、むずかしい言葉を用いず、静かでしたし

力強い。そこには詩人の、物の本質を見極めるゆるぎない確かな眼差しがある。

次は表題の詩

もはや

できあいの思想には倚りかかりたくない

もはや

できあいの宗教には倚りかかりたくない

もはや

できあいの学問には倚りかかりたくない

もはや

いかなる権威にも倚りかかりたくはない

ながく生きて

心底学んだのはそれくらい

じぶんの耳目

じぶんの二本足のみで立っ  
ていなに不自由のことやある  
倚りかかるとすれば

それは、  
椅子の背もたれだけ

大方は、心ならずも日々妥協し、生ぬるく生きているその胸を激しく打つ。学歴や肩書き、財力や地位、出自、時にはその親や子の持つ権威にまで、人は倚り縋ろうとする。また借りものの思想や人生観をうのみにし振りかざす。それでいいのか、と詩人は凜として昂然と言いつつ。何とも小気味よい。

自分の精神の立脚点は、ゆるぎない地平にあるのか、と改めて考えさせられる。

さて『清冽——詩人茨木のり子の肖像——』において後藤正治が「倚りかからず」に生きた精神その航跡を辿る）として本格評伝を中公文庫（二〇一四年十一月）より出版している。

著者は「この詩集が多数の読者を得た背景にはさまざまなる理由があるだろう。

時代的な光景を浮かべれば、東欧・ソ連の社会主義圏の崩壊を象徴する出来事、ベルリンの壁が打ち破られたのはこの十年前である。二十世紀の地球の半分を覆った体制と

それを導いた社会主義思想は歴史の一ページに仕舞い込まれていった。

学問の世界、象牙の塔の権威はとうの昔に崩れていた。見渡して、信に足るとされた思想も宗教も学問も色褪せてしまったとき、詰まるどころ、寄るべきは自分自身にあるもの以外にない。「倚りかからず」という思いは、世の底流に流れる時代的な空気であった。

詩集をベストセラーに押し上げた背景のひとつであるが、もとよりそれは茨木のり子という詩人の力量であり、言葉が人々の心に深く食い込むものを宿していたが故である。私もまた、『倚りかからず』によって彼女の読者となった」と述べている。

続いて、「彼女の訃報が伝えられたのは発刊よりおよそ六年後の二〇〇六（平成十八）年二月であった。追悼に類する文を書く機会があり、あらためて詩集をひもとき、他の詩集やエッセイも手にした。

私が彼女の本当の読者となったのはこの時であった」という。

また茨木のり子を規定している要素はいくつかあるが真つ先にあげられるべきは、その思春期、戦争に身も心も浸した戦中世代という点である、と。

太平洋戦争に突入した年、茨木は、愛知・西尾高等女学校の三年生である、とも著者、後藤正治が述べたとき、私

は初めて彼女の出自を知り、思い掛けぬ身近な人として親近感を深めた。

彼女の父・宮崎洪は長野の人。彼がスイス・ベルン大学での留学を終えて帰途についた船上で庄内出身の青年と意気投合し、この青年の母が大滝勝の乳母であったことが縁になったという。

大滝勝は七人兄弟姉妹の次女として育ち、女学校に通ったのは、明治の終わりから大正の初めの頃、鶴岡高等学校（現・県立鶴岡北高校）である。

その後、縁あって前出の洋行帰りの医師と結ばれた勝は大阪、京都を経て愛知の西尾、吉良へと移り住み、長女のり子、長男・英一の母親となった。

さて、のり子は西尾高等女学校を経て、一九四三（昭和十八）年、東京・蒲田の帝国女子医学専門学校に入学する。やがて戦局は悪化していく。

学生寮の食事も日に日に乏しくなり、食べ盛りの娘たちは空腹を満たすため、どこそこの大衆食堂が開いていると耳にすれば誘い合わせて走り、京浜工業地帯で働く人々と一緒に長い列に加わった。

学徒動員がはじまり、女学校の友人も「女子挺身隊」として愛知・豊川の工場に徴用され、空襲で亡くなっている。時代的な暗さと進路にからまる自身への絶望から自殺を

思うこともあったという。

インタビュール集『二十歳のころ』ではこう語っている。  
〈自分に出会ったことは、ほんとにむつかしいことですね。一番むつかしいことかもしれない。そして、二十歳なんてのは、そのもつともトバ口なんだと思いますね。一番もやもやして不透明で、一番苦しい時期だと思います。〉

一九四五年（昭和二十）年に入ると、医学系の女子の専門学校にも動員がかかる。敗戦の夏、茨木は世田谷区にあった海軍療品廠、海軍のための薬品製造工場に泊まり込みで詰めていて、ろくに風呂にも入れず真つ黒になって働き、原爆投下のことも何も知らなかったという。

〈あれは十九歳ぐらいの時だったと思うんですけど、もう嫌んなっちゃって、いいや、ここで死んでもいいから、みんなと一緒になんか防空壕に入るまいと思ってね、寝たことあります（笑）。そうすると上級生が、みんな避難しましたかあ、なんて部屋の戸開けて点検に来るんですけど、ずっと布団にもぐってました。その時つくづく思ったのは、ああ、これで爆弾が落ちてこっばみじんに死んだとしても、これは自分の死ではないな、と。虫けらみたいなもんで、自分の死ぬってことじゃないって思ったことをおぼえています〉。

わたしが一番きれいだったとき  
街街はがらがらくずれていつて  
とんでもないところから  
青空なんかが見えたりした

わたしが一番きれいだったとき  
まわりの人達が沢山死んだ

工場で 海で 名もない島で

わたしはおしゃれのきつかけを落としてしまった

(中略)

わたしが一番きれいだったとき

ラジオからはジャズが溢れた

禁煙を破ったときのようにくらくらしながら

わたしは異国の甘い音楽をむさぼった

わたしが一番きれいだったとき

わたしはとでもふしあわせ

わたしはとでもとんちんかん

わたしはめつぼうさびしかつた

だから決めた できれば長生きすることに

年とってから凄く美しい絵を描いた

フランスのルオー爺さんのように

ね

第二詩集『見えない配達夫』（飯塚書店）に収録されている「わたしが一番きれいだったとき」である。

終戦となつてすぐ、女子学生だった茨木は郷里に向かった。

東海道線は大混乱で、蒲郡までたどりついたが、無賃乗車であった。郷里の吉良は、東京の激動と混乱が嘘のようにのんびりとしていた。

秋になつて彼女は再び上京する。

大森の軍需工場の跡地が学校の仮の寮となつていた。薬学の世界は一層遠いものとなつていたが、父から「薬学への道を決めたのは私だが、お前それを肯い志を立てた以上、途中放棄はいけない。ともかく薬剤師の免許を取れ。それさえも出来ないようなら、これからやりたいという文学の道だつて貫くことはできなからう」と説得されたからである。

東京の街は、空襲による瓦礫が積み重なり、あるいは焼け野原となつて一望千里となつている。

街角には浮浪者と復員兵が溢れ、一杯の雑炊を求めて人々が闇市に集まつた。

そんな折、よく上野の国立博物館に足が向いた。

美しいものを観ることを身体が求めていた。

様変りしたのは風景ばかりではない。ついこの間まで鬼畜米英を叫んでいた極東の島は一転、民主主義を謳歌する

島へと染め変わっていく。

最初は軍国主義にがんじがらめにさせられていたのが、郷里に帰ってひと月とたたないうちに、民主主義者になっていたんだ、と。

（それが今ふりかえると許せないって感じ。その程度のものであったのかなあという感じですね。国のために死ぬのとおもっていましたから。）

昭和二十一年の秋、茨木は学校を「繰り上げ卒業」している。薬剤師の免許を得たが、敗戦後のドサクサに生れた「ポツダム薬剤師」を自認し、以降、薬剤という仕事にかかわることはなかった。

父・宮崎洪は、娘が文芸の道に進む事を頭ごなしに反対することはなかったが、「才能が少しでもあればの話だが」と言葉を濁していた。

茨木は戯曲の書き手を目指して東京と吉良を行ったり来たりしていた時期もあった。

その後、演劇活動家の山本安英とも知り合い、戯曲・童話の世界に足を踏み入れつつ、結局、茨木はこの道を仕事とすることを選ばなかった。

やがて、彼女は生涯格闘する対象に詩という表現ジャンルを選ぶ。戦争と敗戦、混乱と荒廃、挫折と転身……。過

酷で暗鬱な日々を潜りつつ、若い女性は自分自身と出会ったのである。

茨木のり子の詩がはじめて活字になったのは、詩誌『詩学』の投稿欄、「詩学研究会」で、表題は「いさましい歌」一九五〇（昭和二十五）年である。

ひとりで書いているのはいくらか心細くなったとみえ、村野四郎氏に一度見てもらいたくなり、彼を訊ねた。村野は、戦前から活動してきた詩人であるが、いくつかの詩誌の刊行にかかわり、また選者として若手の書き手の発掘にも熱心だった。

詩学研究会を足場に活動していた若手詩人に川崎洋、谷川俊太郎、山本太郎などがある。のちに『どくとるマンボウ航海記』などで知られる作家の北杜夫も、研究会への投稿者だった。

この前年、茨木は結婚し、戸籍名は宮崎のり子から三浦のり子となっている。「茨木」はペンネームである。詩人・茨木のり子は真面目一途と思われがちであるが、とりわけ散文には、ひょうきんな味も散見される。

茨木の、はじめての詩集『対話』は『権』のスタートからいえば二年後、一九五五（昭和三十）年、二十九歳の年に刊行されている。

もとより、詩人は単独者であり、個性はそれぞれである。

谷川俊太郎は、茨木より五歳下であるが、同じように軍事教練も空襲も体験した。終戦を知って空襲がなくなることを喜びつつ「非日常」が失われることを、どこかで惜しむ気持ちもあったという。

二人の共通項としてあるのは、「詩の大衆化」ということで果たした役割だという。

谷川は詩壇の枠を嫌ってジャーナリズムへと乗り出した詩人であり、茨木はごく日常の生活風景を俎上に載せて、平易な言葉を使って詩を綴ったという「茨木さんは一貫して自分と向き合い、きちんと書いてきた、詩人ですよね。社会とも向き合ってきたそれは彼女の美質だけれども、表現されるものもまた行儀がよくてパブリック過ぎるというか、へたをすると教訓的になってしまう。僕の言い方でいえば言葉を生み出す源の無意識下がきれい過ぎる。そこが物足りない」と谷川は指摘する。

『權』には、同人はほとんど男性達であり、女性は茨木一人であったが、岸田衿子に加わり複数となった。

彼女は一九二九（昭和四）年生れ。劇作家・岸田国士の長女。次女はのち女優となる岸田今日子である。岸田は東京芸術大学油絵学科の卒業生で『權』への入会時は絵描きの卵であった。

茨木の詩の意味について、岸田は次のような見解を口にした。

「難解な現代詩のなかで茨木さんの詩は平易でわかりやすいといわれてきた。でも実は、深いものをわかりやすく書くのが一番むづかしい。フランスの詩人で、ジャンソン『枯葉』を作詞したジャック・フ・レヴェールのように、町の大工さんにも、家庭の主婦にも伝わる詩を書きたいというのが茨木さんだったと思う。一方で、わかりやすそうで難解という詩も茨木さんにもある。詩の受け取り方によって解するものはそれぞれだと思いますよ」と。

一、二年に一度の間隔で同人誌が刊行されていく『權』で見られる茨木作品の最後は「笑う能力」（第三十三号、一九九九年二月）であるが、生涯、茨木は同人であり続けた。

茨木のり子が母・勝を喪って二年後、新しい母・のぶ子がやってくる。多感な少女期、複雑なる思いは当然あったろう。

二十三歳の日、茨木（宮崎）のり子は三浦のり子となる。

夫、三浦安信は大坂帝国大学医学部を卒業。新潟大学医学部助手を経て、東京・東村山にあった結核療養所・保生園の医師となっている。安信はその後港区白金台の北里研究所付属病院の勤務医となっていく。北里研究所の創設者がかつての細菌学の大家北里柴三郎である。

三浦安信の郷里は山形・鶴岡。七人兄弟姉妹の三男である。父・平次郎は開業医で、明治の終わり、鶴岡の城跡に

近い本町で三浦医院を開いた。

茨木のり子の実母、大滝勝は庄内の地主の娘であった。それまで大滝家と三浦家に行き来はなかったが、遠いながらも縁があり、それが縁結びとなった。

三浦安信・宮崎（茨木）のり子の挙式が行なわれたのは一九四九（昭和二十四）年秋である。

茨木は日記を残している。一九五〇年代終わりから六〇年代はじめの頃の日記を開くと、頻繁に「Y」こと夫・安信が登場する。

後樂園へ野球をみにゆく、とか将来のこと（生活の設計）に、ついて話し合う。Yは無策の策を良しとし、私はもっと実利的な面を考えてゆかねばならぬとして、Yを不機嫌にしてみました。などと。

三浦安信は一九六一（昭和三十六）年、二人の結婚生活でいえば十二年目ということになるが、くも膜下出血で倒れ、長期の入院生活を余儀なくされている。

一時は生命も危ぶまれたが、幸い回復し、職場にも復帰した。以降、朝は愛妻弁当を持って自宅を出夕刻には帰宅する生活となった。長時間勤務の臨床医の日々からは開放されたようだが、やや鬱的となることが多く、病弱ともなった。

その後の茨木の日記には、揃って吉祥寺や井の頭公園へ

出かけたたり、あるひと日は、夫の体調や心模様を案じる。ときに連れだつて映画館や喫茶店に出向く。家計のやりくりを算段しつつ、夫のネクタイや自身のスカート地を買い、或る時は仲違いもしつつ、互いにいたわり合う。

もとより詩人特有の暮らしなどない。市井に暮らす、ごく普通の一組の夫婦の日常が浮かんでくる。

夫、三浦安信が肝臓癌で他界したのは一九七五（昭和五十）年、五十六歳の日であった。以降三十余年間、彼女の二階奥の共同使用となっていた六畳ほどの書斎には、川崎洋、谷川俊太郎、金子光晴、鮎川信夫、吉本隆明、木下順二らの著書が並んでいる。その他ハンゲル文字と韓国にかかわる書物の集まる一角もあり、さらに歴史書、古代史、文芸、美術関係等、広い分野にわたる書物が藏されていた。

なかに、夫・三浦安信の使っていたレコード類、それに大学ノート数十冊が立てかけてあるコーナーがある。

大学ノートには、肺癌にかかわる組織検査のデータなどが几帳面な英文で記されている。グラフや統計数字も混じっている。安信は肺結核、肺癌など呼吸器系の臨床内科医であったが、ノートからも学究肌の医師であったことがうかがえるという。

茨木は安信の死後、夫についてこう述べている。

「女房が物書きの道を進むというのは、夫としてはどう

考えてもあまりかんばしいことではない筈なのだが、夫は一度もそれを卑しめたり抑圧たりすることがなく、むしろのびのびと育てようとしてくれた。父、夫、先輩、友人達、私の身辺に居た男性達が、かなり優秀で、こちらの持つていた僅かばかりの芽を伸ばそうとばかりしてくれした。そのため男性への憎悪をバネに自分をかちとるとか、仕事をするとということがなかった」と。

安信は絵心もあった。書齋には、吉良吉田の風景画、さらに妻・のり子を描いた小ぶりの肖像もある。

「結局、安信さんにとってはのり子さんしかなくのり子さんにとっては安信さんしかなかったのではないでしょうかのう」安信の妹、石橋志美の言葉である。

夫・安信が亡くなったのは茨木のり子四十八歳の日、はやい訣れであった。

エッセイ集『言の葉さやげ』に、「清談について」という表題の一文が収録されているが、こんな詩が挿入されている。

清談をしたくおもいます

物価 税金のはなし おことわり

人の悪口 噂もいや

我が子の報告 逐一もごかんべん

芸術づいた気障なもの やだし

受けうりの政談は ふるふるお助け

日常の暮らしから すっぱり切れて  
ふわり漂うはなし

生きていることのおもしろさ おかしさ  
哀しさ くだらなさ ひよいと料理して

たべさせてくれる腕スキのコックはいませんか  
私もうまくできないので懂れるのです

求む 清談の相手

女に限り 年齢を問わず 報酬なし

当方四十歳（とし） やや サバをよんでいる

茨木の詩には、人の暮らしのひとこまをさらつとすくつて、そうだと納得させる詩がいくつもある。

彼女は詩友たちの席では、「文学のブの字」も口にしな  
い人だったという。

夫・三浦安信を喪って一年後、韓国語の講座に通いはじめた。

若い頃から古代史に興味があつて、日本文化のルーツともいうべき朝鮮半島にずっと関心を寄せてきたという。朝日カルチャーセンターの講座は三カ年で修了したが、茨木など熱心な生徒はさらに講師・金裕鴻のもとで勉強することを望んだ。

茨木はいつも「生徒の一人」というスタンスを変えることはなかったという。目立つ事なく、静かに談笑の輪に加

わっている。概してシャイであり、有名人面することは一度もなかった、と。

茨木が出会った詩人に尹東柱ユンドンジュがいる。韓国でもっとも人気のある、若くして獄中死した詩人である。

旧満州の生れ。戦時中、来日して立教大学へ、さらに同志社大学英文科へ、その後朝鮮の独立運動に関与したという容疑で逮捕され、やがて福岡刑務所で収監中に亡くなる。二十七歳。

後年、建築家となり大学教授となった弟・尹一柱と茨木は会っている。

もの静かで、あたたかく、底知れぬ深さを感じさせる人柄。

ハンゲルへの旅は苦労はおおかつたろうが、新しい勉強は茨木自身を救ったのである。

喪失の日々を埋めたのみならず、新たな友人達を生み、そして、永く残る仕事さえ残した。

茨木の詩集の中に次のような詩がある。

マザー・テレサの瞳

マザー・テレサの瞳は

時に

猛禽類のように鋭く怖いようだった

マザー・テレサの瞳は

時に

やさしさの極北を示してもいた

二つの異なるものが融けあつて

妖しい光を湛えていた

静かなる狂とでも呼びたいもの

静かなる狂なくして

インドの徒労に近い献身が果たせただろうか

(中略)

垢だらけの瀕死の病人を

なぜこんなことをしてくれるのですか

——あなたを愛しているからですよ

愛しているという一語の錨のような重たさ

自分を無にすることができれば

かくも豊饒なるものがなだれこむのか

(中略)

瀕死の病人をひたすら撫でさするだけの

慰藉の意味を

死にゆく人のかたわらにただ寄り添って

手を握りつづけることの意味を

——言葉が多すぎます

と言つて一九九七年

その人は去つた

余談になるが、かつて私はマザー・テレサに出会ったことがある。

一九八一年（昭和五六）四月二二日、南山高校にて彼女の講演があることを新聞紙上で知り駆け付けた。校門から構内の会場までの通路を、二列になった人々が彼女を待ち受けていた。

やがて入口近くで拍手が起こり彼女の到着を知った。白い木綿の服を纏った小柄な女性が、ひとり前方からゆつくりと近づいてきた。数人前の一人の女性が歩み去るその背にそっと触れた。それを見た私も思わず同じ行動に出た。

触れた右手をいとおしむように、左手が包み込んだ。言い知れぬ感動が込み上げてきた。

さて、夫、安信の死去四年後の秋、茨木にとつては最も苦しい時期であったが、詩論をまとめて『詩のこころを読む』が刊行された。この本に登場する詩人は彼女に近しい詩人が目につくが、大正から昭和期にかけてのマルクス経済学者で、京都帝国大学の教授であり、社会悪としての貧困を分析した河上肇の詩も取り上げられている。詩人であったことを知る人は少なからう、と。

私は牢の中で

便器に腰掛けて

麦飯を食う。

別にひとを羨むでもなく

また自分をかなしむでもなしに

勿論ここからは

一日も早く出たいが

しかし私の生涯は

外にいる旧友の誰のとも

取り替えたいとは思わない

二〇〇〇（平成十二）年四月、茨木七十三歳のある日、知人の岩川の許に早朝、電話があった。

「ゆうべから少し具合が悪くてね、ちよつと来てくれな  
い」

タクシーで駆け付けると、茨木はソファに横たわり苦しげだった。すぐに救急車を呼び、小金井の病院に運ばれた。胸部の解離性大動脈瘤と診断された。

幸い、内科的治療で治癒したが、他人に迷惑をかけることを極端にいやがる人であった。

茨木の晩年は病を抱えた一人暮らしの老婦人ではあったが、万事きちんとした人で、家や庭の手入れも怠らず、人に会えばつい、自身の病や孤独の身の上をこぼすのが老境の習いであるが、愚痴に類することは口にしなかったという。

彼女が、強い人。だったとは私は思わない。ただ、自身

を律することにおいては強靱であった。その姿勢が詩作するとうエネルギーの源でもあったろう。たとえ立ち竦むことはあったとしても、崩れることはなかった。そのことをもつてもつとも彼女の〈品格〉を感じる、と後藤正治は述べている。

同書の解説で梯久美子は

清冽の流れに根をひたす

わたしは岸辺の一本の芹

わたしの貧しく小さな詩編も

いつか誰かの哀しみを少しは濯うこともあるだろ

うか

の詩を引用し清冽という語には、やさしさよりもきびしさ、穏やかよりも烈しさのニュアンスがあると。

谷川俊太郎は「背丈があつて目を引くほどの美人でしたね。躰の良さがにじみ出ている、折り目正しい人柄もいい」と評している。

後藤正治著『清冽』のカバーを飾る、書棚を背景にした彼女の写真は、品格があり谷川の表現通りである。

二〇〇六年二月十七日、三浦（茨木）のり子、死去。七十九歳。遺体はすぐ荼毘に付すこと、通夜や葬儀や偲ぶ会などは無用、詩碑その他も一切お断りするよう。死後日数を経て近しい人々に「別れの手紙」を差上げてほしい、と。その手紙は鉛筆書きで記されていた。年と月日は空欄

にしたまま、三つ折りの葉書大の手紙が印刷されていたのは死去の三ヶ月前であった。

(ゆもと あきこ)